

社会科

1 育成したい「思考力」

社会的事象について、事象が内包する事実を既有経験を基に比較・類別して特色を捉えたり、その特色から問いをつくり、時間的・空間的視野や立場の広がりの中で事象相互を関係づけ、その意味や価値を捉えたり、その意味や価値を基に社会の全体像を再構成したりする力

社会科では、現実社会を理解し、公民的資質の基礎を養うことをねらっている。よって、授業を窓に、社会の姿が分かる授業づくりが求められる。そのためには、一つ一つの社会的事象の目に見える部分を知るだけでなく、事象の意味や価値という見えない部分を理解し、社会の姿を総合的に判断し、子ども自身が社会への解釈を描き直す必要がある。この過程で働くのが上記「思考力」である。

(1) 比較・類別し、特色を捉える力

「比較・類別し、特色を捉える」とは、対象となる事象が何で、他とどこが同じで何が異なるのか、といった事象そのものを捉えることである。具体的には、事象の目に見える部分を丹念に調べ、事象を構成する事実や関連する事実を比べたり、仲間分けしたりすることを通して、一つの、又は複数の事象の特色を明らかにすることを指す。その際には、一つ一つの事実が子どもの経験と結び付いた状態で理解されていることに留意することが必要である。以下に実践例を紹介する。

第3学年「めぐって 見えた 学校のまわり」

【本単元で育成したい「思考力」】

住宅や店の広がり、公共施設の位置、道路の様子等を手がかりに、探検したコースを比較・類別して、学校の周りの特色を捉える力

まず、家や店の位置、人や車の様子を手がかりに、学校の南側と西側を比べた。それによって、子どもたちは学校の西側にある広い道路の辺りには大きな車が通ることが多いが、学校の南側にある狭い道路の辺りには自転車で通る人が多いという差異点や、家が多いという共通点を見いだした。そして、その後探検した学校の東側・北側についても上記の手がかりで仲間分けをすることで、学校の周りの様子をまとめていった。これが比較・類別し、学校の周りの特色を捉える力である。



【共通点，差異点を探す】

(2) 時間的・空間的視野や立場の広がりの中で事象相互を関係づけ、その意味や価値を捉える力

「時間的・空間的視野や立場の広がりの中で事象相互を関係づける」とは、その関係する事象を時間的・空間的視野や立場を広げて、事象の相互関係を「目的と手段」「原因と結果」等と見いだしていくことである。「その意味や価値を捉える」とは、こうした事象の機能，成因，影響等を明らかにすることである。

○ 「時間的」「空間的」な視野の広がりの中に存在するさまざまな事象と関係づける

追究対象である事象が存在する「時」から過去や未来へと視野を広げたり、その事象が存在する「位置」から範囲を広げたりしていく中に存在するさまざまな事象との関係を考える。以下に実践例を紹介する。

第5学年「これからの食料生産 —瀬戸内鱸の資源管理—」

【本単元で育成したい「思考力」】

激減した瀬戸内鱸の資源回復について、時間的・空間的視野や立場を広げ、資源を回復させてきた取り組みを予想し、資料から長期的展望に立った広域的な協力体制によって「みんな育て、あとでとる」取り組みが、鱸資源を増やしたことを捉える力

瀬戸内鱈の激減という課題について、今すぐは難しくとも、未来に解決するために何かできるのではないかと考えた。「鱈の漁獲量の推移」と「鱈を増やす取り組み年表」をつなぎ、鱈資源が回復してきたことと、鱈の稚魚を放流し、秋漁を自粛したこととを関係づけた。これが、時間を広げて事象相互を関係づけるということである。

また、香川県内の取り組みだけでは難しいが、広域の協力体制によって可能ではないか、と考えた。「鱈の回遊範囲」と「鱈を放流している所」の地図資料をつなぎ、鱈資源が回復してきたことと、県の取り組みが瀬戸内海沿岸11府県に広がり、協力して鱈の稚魚を放流してきたこととを関係づけた。これが、空間を広げて事象相互を関係づけるということである。

これらのようにして、瀬戸内海の鱈を増やすためには、瀬戸内海沿岸の11府県が、協力して、未来のために今をがまんしなければいけないと捉えるのが、時間的・空間的視野の広がりの中で事象相互を関係づけ、その意味を捉える力である。

○ 「立場」の広がりの中に存在するさまざまな事象と関係づける

追究する社会的事象を、例えば「官から民」「消費者から生産者」等と立場を広げていく中で存在する事象との関係を考える。以下に実践例を紹介する。

第4学年「南海トラフ地震から、わたしたちの暮らしを守る人々」

【本単元で育成したい「思考力」】

家族、公的機関、地域の人々それぞれの取り組みを調べ、それらを相互に関係づけ、防災の意味を捉える力

子どもたちは、自地域の防災・減災の力を高めるために、まず、地震により公的機関が来られなかったにもかかわらず、多くの命が助かった地域を事例地として、その理由を探った。そのためには家族や公的機関、地域の人々へと立場を広げて、「地震による人的被害の数」と、資料から調べた村役場や自治会、各家庭のそれぞれでしていた被害を防いだり減らしたりする工夫をつなぎ、白馬村での死者がいなかったということとジャッキの準備、ハザードマップの作成、安否確認システムの作成等の取り組みをしていたことを関係づけた。それが、立場を広げて事象相互を関係づけるということである。このようにして、自分や家族だけでなく公共機関や地域とも協力し合うことが大切だと捉えていくのが、立場の広がりの中で事象相互を関係づけ、その意味を捉える力である。

(3) 社会の全体像を再構成する力

「社会の全体像を再構成する」とは、子どもが既習事項や生活経験から得た断片的な情報を基に解釈していた社会の全体像を、教材からの学びや友達との学び合いの中でその解釈を磨き合い、修正したり、より妥当性の高いものに組み替えたりして描き直すことである。以下に実践例を紹介する。

第6学年「巨大金銅仏造営－国家プロジェクトを支えたもの－」

【本単元で育成したい「思考力」】

巨大金銅仏造営を中心に調べ、時間的・空間的視野や立場を広げることで事象相互を関係づけ、その影響や携わった人々の思いや願いを捉え、国家的事業に対する解釈を再構成する力

子どもたちは、大仙古墳造営から巨大金銅仏造営に対する自分なりの解釈をもった。「大仏造営が生活をよくすることにつながるのか。民は望んでいたのか。」という問いを追究することで自分の考えを組み立てる材料を増やし、現在とは大きく異なる奈良時代の現状や当時の人々の思いや願いに迫ることで、聖武天皇が行った国家的事業に対する解釈をより妥当性のあるものに近づけた。「権力を誇示し争いをなくすため」という解釈を、新しく捉えた「仏教」「世の中の乱れ」「民の生活」等の中で何が妥当か判断し、「仏教の力で世の中の乱れや民の生活を改善しようとした」と組み立て直した。これが再構成する力である。



【思いや願いに迫る話し合い】